



Title	日本語の「逆接」の接続助詞とその周辺：理論と記述の接点をめぐって
Author(s)	衣畑, 智秀
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46564
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 きぬ はた とも ひで
衣 畑 智 秀

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 19785 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 17 年 9 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科文化表現論専攻

学 位 論 文 名 日本語の「逆接」の接続助詞とその周辺—理論と記述の接点をめぐって—

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 金 水 敏

(副査)

教 授 蜂 矢 真 郷 助 教 授 渋谷 勝 己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語のいわゆる「逆接」を表すと言われる接続助詞を対象として、理論的枠組みの提示、意味の分析、歴史的変化についてまとめたものである。

「序論」では、研究の目的、「逆接」研究における本論文の位置づけ、「逆接」の定義、本論文全体の構成について述べている。続く第 1 部「現代日本語の「逆接」の接続助詞」には、第 1 章「理論的背景」、第 2 章「知識の否定と文脈の否定—ノニとテモ・ケド—」、第 3 章「文脈の否定—テモとケド—」、第 4 章「知識の否定—ノニとクセニ—」、第 5 節「他の「逆接」の接続助詞の意味記述」が含まれる。第 2 部「古代日本語の「逆接」の接続助詞とその変化」には、第 6 章「古代語のトモ・ドモ」、第 7 章「古代語の知識否定形式—上代・中古のヲ・モノヲの成立と展開—」、第 8 章「「逆接」の歴史」、第 9 章「接続助詞から副助詞へ—日本語の統語変化として—」が含まれる。最後に「結論」の章を置く。さらに、「調査・出典文献一覧」、「参考文献一覧」、「既発表論文との関係」を付する。B5 判縦書きで 186 頁、400 字詰め原稿用紙に換算して約 370 枚に相当する。

第 1 部では、従来「逆接」の接続助詞としてまとめられていたノニ、テモ、ケド等が先行文献において十分な記述に到達していないことを指摘し、新たに関連性理論に基づいて、「知識」と「文脈」の区別および処理単位の区別という理論装置を導入する。これに基づき、ノニとテモ・ケドが知識の否定を表すか、文脈の否定を表すかという違いによって説明されるべきこと、文脈否定のテモとケドが処理単位の違いによって分化していること、ノニ、クセニが知識否定の接続助詞であることを述べ、さらにトコロデ、カラッテ、モノノ、ナガラ (モ)、ニモカカワラズ等の接続助詞の記述をも試みている。第 2 部では、古代語のトモとドモの意味の違いが仮定か仮定以外かによって区別できること、モノヲが知識否定の形式であること、古代語から現代語への接続助詞の推移、ナリトモを例に統語変化による接続助詞から副助詞への変化等について述べている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、従来、十分な理論的枠組みを与えられないまま、「逆接」として一括されてきた古今の接続助詞を、新たな理論の光のもとで分類し、解釈し、またその歴史的動態を明らかにしようとした、意欲的業績である。記述的な

精度と、理論的な構築性と、その双方のバランスをとることに筆者は意を砕いており、その狙いは十分成功していると評価できる。

例えば筆者は、関連性理論 (relevance theory) に基づき、言語主体が処理する情報を「知識」と「文脈」に二分することを提案する。すなわち、話し手が真であると信じている情報、および真であってほしいと願う情報を知識と呼び、聞き手が知覚可能あるいは推論可能な、顕在的な情報を情報と呼んでいる。これに基づき、逆接の接続助詞を知識否定と文脈否定に分類する。例えばノニは、話し手の知識が後件によって否定されることによって生じる話し手の「違和感・意外感・不満」を表す形式であり、文脈の否定を表すテモやケドとはこの点で対立するとしている。またテモとケドについては、文脈処理の単位が異なるとし、テモは前件と後件を一体として処理するのに対し、ケドは前件と後件を別に処理することを表す形式であるとする。

このような視点は極めて斬新で独自性が高く、これらの形式について説明する限りで説得力があり、成功しているといえる。筆者は、これら「知識」「文脈」「処理単位」といった、新たに定義し直された概念を軸に、他の現代語の接続助詞や、古代語の形式、さらにそれらの歴史的変化へと対象を広げていくが、その議論はぶれがなく、一貫性をもって読み進めることができる。古代語トモの意味に関する解釈も、海外の研究を参照しながら、従来見落とされていた「仮定条件」の特性を説得的に示し、みごとな整理を示した。

ただし、議論を広げていく過程で、問題とすべき点も現れてきている。例えば「知識」「文脈」「情報」といった鍵概念は、基本概念であるだけに誤解・誤読も生じさせやすく、また「談話管理理論」等、他の関連する理論的業績との関連もあいまいである。一層整理・洗練をほどこす必要がある。また、歴史的な議論については、取り上げる対象の選択がいささか恣意的な印象を与え、未だ十分包括的な議論になっているとは言えない点、物足りない。「已然形」の消失など、形態に関する議論の重要性が認識されながら、あいまいに示唆されるにとどまっている点も指摘しておくべきであろう。なお、第9章の統語変化の議論は、第8章までの問題意識とはかなり方向性が異なっており、これはこれとして重要な指摘が見られるが、なお議論の余地が多々残されている。

しかしこれらの点は、膨大な課題に対して有望な出発点を示しているが故に見えてくる問題であり、本論文の疵と言うよりは、筆者の示した方向性の正しさをむしろ示していると言うべきであろう。今後の探求により、十分乗り越えられることが予想されるのであり、このような将来性も含めて、本論文の学界に対する貢献は極めて大きいものがある。博士論文としても、十分な水準に到達していると認められる所以である。

なお、2005年7月22日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。